

53 『灸炳塩土伝』の意義

篠原孝市

『灸炳塩土伝』二巻は、江戸中期の和方家・三宅意安の手になる灸法書で、宝暦八年（一七五八）の序文が付されている。古伝の灸法を六十七条にまとめたもので、書名の由来は、『日本書紀』巻第二・神代下の一節「於是彦火火出見尊。不知所求。但有憂吟。乃行至海辺。彷徨嗟嘆。時有一長老。忽然而至。自称塩土老翁。乃問之曰。」による。

わが国の灸法は、平安・鎌倉期以来、絶えることなく続いてきたが、専門技術を要しないこともあって広く一般に浸透し、江戸中期には和漢の諸書に基づく古来の灸法とその変法のほか、民間でも様々な出自未詳の灸法が行われていた。本書はそれらを「日本伝来」の名のもとに幅広く採録したもので、同系書である『阿是要穴』『名

家灸撰』と並んで、わが国の十八世紀までの灸法総体を窺うための絶好の資料である。

本書の現存テキストは全て写本と近代以降の油印本で、版本は確認されない。よって以下の検討では、従来影印された唯一の写本である京都大学富士川文庫所蔵本を使用する。

本書の巻一は全二十二条、巻二は全四十五条からなる。ただし底本の本文では巻二の第五十三条が条文の態をなしていないので、目次に基づき補正する必要がある。また各巻の目次と本文の見出しにはかなりの異同がみられる。各条文では、先ず最初に漢語で主治病証を、次に取穴法を記す。これに図や著者の按語が付く場合もある。最後に「伝曰」としてその灸法の由来、伝承者の伝記的事項（家系など）が述べられる。

本書中の灸法の出自を一覧すると、民間の無名氏伝承のものが全条数の四分の一に及ぶ。以下、引用条文の原資料（出自と伝承で複数の資料の関与もある）である書名と人名に限って、書中から採録する。人名・書名が一体で書かれている場合はそのまま、それ以外は各々別に採録

した。括弧内は条番号、?は伝承や疑義の場合、□は難読字をさす。

『素問』血氣形志篇(66)、『外台秘要方』所引崔氏(02)、『神庇経』(05)、『類経附翼』(60)、和丹(05、27?、58?、59?)、丹波氏(08、39)、丹波康頼(22)、丹波頼直(16)、丹波時長(32)、永田徳本『梅花無尽蔵』(12)、田代三喜(02)、曲直瀬道三(02、12)、『聖功方』(12)、曲直瀬正純(67?)、今大路氏(11)、寿命院立庵(24)、竹田法眼定加(31)、亀山良心(09)、杉原伯耆守(26)、中條帯刀(07)、味岡三伯(03、46、47、48、49、50)、岡本一抱(09、14、33、58、59)、『阿是要穴』(09、33、58、59)、中山三柳(34)、古林見宜(13、16、43、54、55、56)、猪飼仙庵(17、39)、松下見林『見宜伝』(13)、香月牛山(06、21、64、65)、福井可助(08、23)、福井南竹子『福井南竹翁』(21、27、35)、福井老人(41、45、64、65)、熊谷竹隠子(09)、寺嶋良庵(30)、寺嶋良安『和漢三才図会』(67)、大久保道古(60)、平泉鬼貫(60)、北條安房(11)、長崎意仙(15)、奈良店雅詮(18)、長門神□(23)、川村医生(28)、黄檗山独立禅師(43)、松本知新(51、52、53)、林周徳(57)、北村利旦(61)、

重松義旦(61)、山辺雅詮(63)、撰津西宮縣池淳庵(62)、大和国西谷村一農夫甚太郎(19)、大和国□医西谷村甚太郎(37)、伊勢国度会之□客堅神孫右衛門(25)、伊勢国野人(35、41)、伊勢国山田村鏡円寺之僧(38)、美濃国大垣之野人(45)、河内国一農夫家秘(15)、和□郡山一農夫家伝?(04)、土佐国高知府一農家(10)、土佐国高知府一士家(20)、土佐国高知府野人(28)、土佐国下津野一農大石氏(54、55、56)、薩摩国土人(33)、讃岐国高松野人(42)、讃州一田夫(44)、家君(42、60、66)。

主治の面から見ると、四条以上の条文が当てられているのは婦人血塊、癰疽瘰癧、喘息厥逆、驚風癲癇、瘧疾の五病証である。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)